

読書する農民

—プロイセン近代民衆啓蒙史像の再検討—

増 井 三 夫*

(平成6年10月31日受理)

要 旨

本研究は従来の研究史にみられる民衆啓蒙史像を検討し、民衆啓蒙の意味を再構築しようとした試論である。この過程は同時に啓蒙を教育と機械的に対置させる教育史認識の再検討をとものうことになる。 (i) 18世紀の啓蒙主義は民衆にその啓蒙の光をどのようにあてたのか。これは史実と研究史において問われなければならない。周知のように、長い間民衆、とくに農民は、啓蒙家および研究者によって、啓蒙されるべき無知な対象と捉えられてきた。(ii) ところが1960年代ころから民衆啓蒙史研究は書物と新聞の出現に注目した読書社会史の地平を拓き、「読書狂」時代を発見した。だがその読書界には農民の姿は捉えられなかった。農民はいまだ読書する能力をもたない存在であった。この観念はとくに啓蒙家と研究者にとって牢固として抜きがたいほどのものであった。(iii) 60年代以降の民衆啓蒙史研究も、残念ながら、とくに農民の啓蒙について、上記の伝統的な農民像に依然として拘束されたままで、すなわち読書力(識字力)の〈欠如〉の壁に阻まれて、いわば閉塞の状況にあった。(iv) ところが、近年、読書する農民の存在が次第に掘り起こされてくるに従い、18世紀の啓蒙主義時代に啓蒙される農民から自己啓蒙する農民の姿が浮かびあがってきた。筆者もすでに別の機会にメノッキオ(C.ギンスブルク)、ナド(喜安朗)に比せられるカリースを見いだしたが、カリースの存在はまさしくこの農民の存在を予感させるに十分なものであった。

KEY WORDS

読書する農民	Der lesende Bauer	民衆啓蒙	Volksaufklärung
読書力	Lesefähigkeit	自己啓蒙	Selbsterklärung

I. 近代民衆啓蒙史像再検討の視座

[i] 啓蒙という言葉でわれわれは直ちにカントの『啓蒙とは何か? この問いの答え』(1784年)を想起する。その冒頭の一文、「啓蒙とは人間がみずからに責めのある未熟状態から脱出することである」⁽¹⁾はまさしく「啓蒙の時代」を象徴するものであった。それではこの「啓蒙の時代」を標す特徴はどのようなものであったのか。それはなによりも「思惟様式の真の改革 wahre Reform der Denkungsart」にあった⁽²⁾。すなわち、この時代は「自らの行動を認識して精神的

* 教育基礎講座

な自己点検を行い知的予見を立てることこそ、思惟一般の固有な意義であり本来的な課題である」とし、「知的探求と知的好奇心」を外的世界と内的世界に向けたのであった⁽³⁾。それではこの「思惟様式の真の改革」はすべての人間にとって可能とみなされたのか。カントは「自分の精神を独自に加工することによって未熟状態を脱出し、しかも確実な前進をうまくなし得る人はほんのわずかしかな存在しない」と断って、「しかし公衆 Publicum」が「読者界 Leserwelt」において「自分自身を啓蒙することは、それ以上に可能である」とみていた⁽⁴⁾。この「読者界」が「文芸的公共性」(J.ハーバーマス)を意味していることは明白であるが、それ以上に注目すべきはこの公共性が、公衆が読書などを媒体とした対話や論議をつうじて「自己啓蒙」する「練習場」⁽⁵⁾であると同時に「啓蒙の方法」⁽⁶⁾と捉えられていたことである。

〔ii〕　そこでわれわれもその文芸的公共性をベルリンでみてみよう。1784年のベルリンは人口14万5千人を擁する大都会で、「ベルリン啓蒙主義」と称せられるように書籍の商況に沸きたち、文芸的公共性が歴史的な姿容を現し始めた時期に相当した。その啓蒙主義に関心を抱く代表的な文芸的公共性は雑誌であり、その一つが『ベルリン月刊誌』であった。この文芸的公共性は教養世界のものであったが、この雑誌で公然と民衆の啓蒙が論じられたことはやはり注目されるべきである。その代表的な論客が当時29歳のギムナジウム校長であったF.ゲディケであった。彼は論説『ベルリンについて』(1783—1785年)で初めてベルリンの公衆に下級学校の教授法を含めた「思惟様式の真の改革」を提起した。従ってこの公共性は当の民衆が自ら自己の思惟様式を改革する「練習場」とはなりえないものであったが、しかしながらここでの論議は、民衆世界にも、雑誌という文字を媒体とする文化の商業的普及によって、新たな自己啓蒙の場が誕生する可能性が熟しつつあるという時代認識を、公衆の間に喚起するものとなった。そこで次に改めてゲディケの該当箇所を摘要しておこう。

ゲディケが論議の対象としたのは当時流行していたヘーン (J. F. Hahn) の「文字教授法」(「表化教授表」)であった。この教授法は当時「全王国において公的および私的な教授のみならず、ヴィンケルシュレーにも」普及していたが⁽⁷⁾、同時にこの有用性を巡る論争もおこっていた⁽⁸⁾。ゲディケは、この論争に参加し、上記の箇所に続けて「ヘーン教授法の実態が明らかになれば直ちに、いたるところで嘲笑の聲が沸き上がることになろう」と述べ、ヘーン教授法に対して否定的な論陣をはっていたのである。すなわち、文字読力の「正確さ」ということでヘーン教授法に公衆は目を奪われているが、しかしこの教授法は「調教」に他ならず⁽⁹⁾、「有益かつ有用な知識を熱望している市民的な人間知性とまったく相いれない」「嫌悪すべき文字教授法」である、と批判されたのである⁽¹⁰⁾。これに対してゲディケは、当然のことながら、レカーン校におけるコミュニケーションの教授法と判断力と想像力を自在に操作することのできる文章読力の形成に高い評価を与えたのである⁽¹¹⁾。

〔iii〕　カントが「自己啓蒙」の場として期待したいま一つのは教区であった。その立論は、教区民が信条によって「今後なされる一切の啓蒙を永久に阻止」されることは「絶対的に無効」であり、「自分の理性を公的に öffentlich 使用している聖職者」はこの「不条理」を廃し、教区民の「啓蒙を前進させ」なければならない⁽¹²⁾、というものであった。この主張が啓蒙主義聖職者である「宗教革新者 Neolog」のそれと同一のものであったことはいうまでもない。その代表的な一人である J. J. シュパルディンク (1764年に聖ニコライ教会プロプスト兼改革派高等宗務官に就任) は、J. Ch. ヴェルナーのルター派正統派宗教政策 (1788年) に抗して論陣をはり、教区聖職者は説教壇から下りて教区民と「同じ人間」として彼らの日常的な「思惟様式」

を啓発してその日常生活の自己改善を喚起する使命を負っておりかつこれを実践すべきである、と主張した。実際に当時の「宗教改革者」は、教区にあって聖職者が教区民を説教壇上から「支配する」「宗教の教師」たる地位と意識を棄てた、教区民の「理性」と「啓蒙の可能性」に信頼をおく「楽観主義」者であった⁽¹³⁾。この実践の拡がりが上記の激しい「宗教改革者」狩り政策を招来したこともすでに周知の事柄に属すといつてよい⁽¹⁴⁾。

18世紀70/80年代以降の農村社会は、以上のように、社会的紀律化空間⁽¹⁵⁾の内部にはっきりと農民の自己啓蒙の空間を生みだしていた、と予測することができるであろう。事実、ごく普通の農村社会のただ中に、教化されるべき未啓蒙な・無知な愚民⁽¹⁶⁾ではない、いまや自己自身を啓蒙する新たな農民が姿を現してきたのである。19世紀の10年代にマルクブランデンブルクの農村社会で読み書きできる農民の姿はもはや決して珍しい存在ではなくなっていたことも⁽¹⁸⁾この史実を確認するものである⁽¹⁷⁾。

〔iv〕 農民の自己啓蒙空間は決して教区に対する隠喩ではない。上記の教授法改革論議はまさしく教区の民衆啓蒙の実践から発せられたものであったのである。その発信地がF. E. v. ローホーの所領教区内のレカーン校であり、これが「全農村学校の模範」(ザルツマン)となったこともすでに研究史では踏みならされた道である。筆者は当校教師H. J.ブルンス(1773—1794年在籍)のコミュニケーション的教授法による基礎学力の水準についてすでに別の機会に考察しているが⁽¹⁸⁾、さらにその後筆者がおこなった未刊行教会・学校査察文書の調査によるとこの教授法はカリースを出したノイホラント校⁽¹⁹⁾のみならずブランデンブルク校とヨアヒムスタール校へも導入されて成果をあげていたのである⁽²⁰⁾。それでも、確かに、このような実践校の調査はいまだ十分とはいえないが、しかしその確かな潮流は認められるであろう。この点をも同時に傍証するものとして、さらに18世紀末に教育実践の交流誌が多数刊行されたことにも注意がむけられるべきである。

教育雑誌はG.ペトラートによって多数発掘・収集されているが⁽²¹⁾(ブレーメン大学)、なかでも注目すべきはH. G.ツェレンナー編集の『デア・ドイチュ・シュールフロインデ』誌(1791—1801年)である。この誌上で教授法と基礎学力が主として現職教師によって論じられたのであるが、ここで健筆をふるったハムのF.ヴィルベルクはあのブルンスの弟子であった(後にハムで教員ゼミナールを設立)。ここにもレカーン校の教授法と基礎学力が教育雑誌の中心的な論点となっていたのである。この点はまた同時代のもっとも代表的なJ. G.クリューニッツの啓蒙主義的百科事典にも詳述されていた⁽²²⁾。このように民衆啓蒙は教授法と基礎学力のレベルで「自己思考 Selbstdenken」の問題として教育雑誌および百科事典上で地方の枠を越えて論じられていたのである⁽²²⁾。とくにこの教育雑誌が教師の間に文芸的公共性を作り出していたとみることはもはや牽強附会であるとして斥けられることはないであろう。この公共性でこそ農民の啓蒙がまさしく農民自身の自己啓蒙の問題として論議されていたのである。こうした民衆啓蒙の論議が「啓蒙の時代」をいま一つ特徴づけるものであった。

〔v〕 さてこの農民自身の「自己思考」は、カリースに見られたように、伝統的な農村社会関係に規制された思考と行動の制限を衝き破り、しかも口頭伝承、自己自身の行動および心理的な体験を文字化することを可能にする「知的能力」を意味した⁽²³⁾。それではこのような「知的能力」はどこで習得されたものであったのか。この点について喜安朗のフランスにおける「19世紀のとくに前半までの民衆階層の読み書きを身につける過程」の分析は貴重なかつ刺激的な示唆を与えている。

喜安は、1844年当時フランスの新聞論評で使用された「知的能力」が「書く能力」と読書力としても考えられていたことを強調し、これが「身につけ」られる過程を具体的人物にそくして例示しながら、この「過程は、きわめて多様なものであって、学校はその多様な道程の一部を占めるにすぎない」という注目すべき指摘をおこなっている⁽²⁴⁾。同時にその「過程」の考察で次々に論及された「独学の人」の「黙読」⁽²⁵⁾、「労働者詩人」の「詩作」⁽²⁶⁾およびこの両者が「交錯し複合しながら接合している」ことの指摘⁽²⁷⁾は筆者に強烈なインパクトを与えるものであった。この「独学の人」と「労働者詩人」こそが自己啓蒙の実践者であったとみられるのである。その実践のうちに「自分自身との対話を繰り返し積み重ね」「新たな自己の発見」と同時に「新しい世界」を拡げていく農民の姿はカリースのそれと重ねあわせることができるものであった。その姿をここでは〈読書する農民〉と象徴的に表現したのである。その〈読書する農民〉はプロイセンにおいて同時代人の啓蒙家とその研究者の目にどのように映じていたのであろうか。それを問うことはその両者のまさしく歴史認識にも衝き当ることになるだろう。

とくに啓蒙を教育と機械的に対置させ、たとえ結果的にであれ、民衆を啓蒙＝教育されるものと捉えたり、かつ啓蒙手段（例えば道德週刊紙）の機能に教育の2文字を機械的に冠せる教育史認識⁽²⁸⁾は再検討されなければならない。ただし本研究では書く読むいわゆる識字能力の形成の手段と機関は、喜安とは異なるが筆者の研究上の制約で、レカーン校型の農村学校に限定された。この型の農村学校が18世紀70年代以降ではもっとも有効な手段かつ機関であったと認められるからである。もちろん同時代の農村学校がすべてそうした条件を満たすものではなかったことも事実であった（むしろそうした不備な学校が遥かに多数であった）。だがそうした状況にあって、同一教区内で複数の学区をもつたとえば上で例示したパブリッツ教区でも4学区中ケムリッツ、リノの2学区がその条件を十分に満たしていたように、世紀転換期に近づくにつれてケムリッツ、リノおよびブランデンブルク、ヨヒムスタールそしてノイホラントのような教授法の改革を実践した学校が、まさしく周辺がごく普通の農村で劣悪な学校状況にあった地帯から、誕生しつつあったのである。確かにこの数は現在の調査ではいまだ数少ないが、この史実こそが民衆啓蒙を解く鍵となると予想されるのである。本稿はこうした視点で研究史における民衆啓蒙像を再検討した序論的考察である。

II. 近代民衆啓蒙史像の再検討

[i] 民衆啓蒙の用語自体はここでの新造語ではもちろんない。が、その用語の本格的な使用（出現の年代史的考察ではなく）は1977年のR.シェンダおよび1978年のR.ジーゲルトによる民衆本の社会史研究から⁽²⁹⁾発展した1990年のH.ベーニークとR.ゾーゲルト共著の『民衆啓蒙』であろう⁽³⁰⁾。ここで使用された民衆啓蒙は基本的に「大衆」（ギムナジウム、大学卒業程度の学識を有しない者、平均的手工業者、下級官吏、都市下層民、農民等）を対象とする啓蒙を意味している。だがわれわれが注目したい点は、1750年代に「民衆啓蒙の転換期」をむかえ、「文字手段による民衆啓蒙の最初の試み」がみられたということである。この「試み」は、確かに、民衆が「自己思考、自己反省が可能」となり、「自然の変化を把握し合理的に利用する」「科学」を農民にも知らせるべきという啓蒙家の判断の転換に起因するものであった。しかしながら、ここには民衆自身が啓蒙の客体から転換し自己学習＝自己変革の主体として登場した

ことをしめす記述はベーニクにはみられない。むしろ学校授業の不振による代償として学校外の啓蒙が重要であると啓蒙家に認識されていた、と捉えられている。これは同時にベーニク自身の見解でもあった。

ところが、ベーニクがズィーゲルトとともに調査した膨大な数にのぼる民衆啓蒙書リストから、1750年代より農村地帯に読書人が確実に増加しているように認められる。そのうえ読本の種類は読書人の関心に対応して、後にもみるようにたとえば恋愛本といったように多様であった⁽³¹⁾。この事実は農民が確かな読書力を身につけてさらに自己の好奇心をみたそうとする読書人として登場してきたことを例証するものである。さきの啓蒙家の判断は、「自己思考、自己反省」できる農民が、啓蒙家によって、発見されたと読みかえられるであろう。このようにして、われわれは、まさしく視点を転換することによって、これまで描かれてきた啓蒙史像から新たな教育史像、すなわち民衆啓蒙史像を再構成したいと考えている。幸いにも現在、農村における読書人の存在と民衆本の普及がともに社会史研究者に注目されつつあり、われわれが使用することのできる貴重な成果が発表されてきている。

〔ii〕 農民読書人の研究は主として農民新聞発掘史の分野から着手された。すでに農民新聞（雑誌）の種類については、ここではその一覧について直接言及しないが、かなり整理されている⁽³²⁾。この整理に依拠して購読者の読書力と新聞購読数との関係がこれまで論じられてきた。ところがその論及には共通して奇妙と思える矛盾がみられる。たとえば、この分野では開拓的な研究者E.グラートホフは、農民新聞を（i）道徳関連週間紙、（ii）政治関連紙、（iii）農業関連紙に分類して、代表的な新聞の内容を詳説し、これらの新聞が農民を各分野ごとに啓蒙するものであったとしている⁽³³⁾。グラートホフはこのような農民啓蒙紙が登場した理由の一つに村落学校の教授不振ないし欠如をあげ、その代替物が農民啓蒙であったとみている。この見解は、農民の読書力を認めない同時代人の認識を無条件に信頼しすぎていることに起因している。だがグラートホフが考察した新聞内容を見ると、それは、明らかに、農民が読者であることを前提としているのである。

問題は結局農民新聞は民衆啓蒙を目的とするが、しかしだからといって農民とは啓蒙される存在であるとは自動的にとはならないということである。グラートホフがあげた新聞では、農民の要求（＝情感的好奇心）をみたすような内容がすでに掲載されているのである。たとえば、下世話な噺等である⁽³⁴⁾（とくに第1類の新聞は反対にこうした農民の「欲望、嫉妬、無作法を否定して礼儀正しさ、誠実」等を啓蒙する内容であった）⁽³⁵⁾。このことは、後段で再び論じられるが、18世紀において、農民自身がこうした欲望・嫉妬といった自己の欲求を書字（＝記号）を媒体としてイメージの世界で満たそうとする読書人へ、さらに農村自体が伝統的な口承無文字社会から文字社会へ、同時代人の民衆啓蒙家の眼には一見無変化のように映じながら、しかし確実に、それぞれ転換しつつあったことをわれわれに感得させるものである。

1960年代にはいつて、農民啓蒙と民衆新聞を論じた成果が次第に発表されてくる。H.ランゲノールはこれを教育史学から論じた最初のものである。ランゲノールの論述は、上掲第1類紙を対象としており、したがってこれにも起因すると考えられるが、道徳関連週間紙を、民衆を「妄想、憂悶、不信仰」から護り、民衆を「徳と理性によって人間化」する新たな教育手段の登場とみなし、汎愛主義および敬虔主義の教育実践と合わせて、注目すべき民衆啓蒙の実践と描きだしている⁽³⁶⁾。ただし、ランゲノールも道徳関連週間紙『デア・パトリオート』（1724—1726年、ハンプルク）の発行部数6,000部をあげ、この出版の増加が「読書する民衆の要求を反映し

た徴候」と認めざるをえなかったようである⁽³⁷⁾。しかしこの点にかんする彼の考察は、その実証を含めて、残念ながらこれ以上に展開されていない。

ランゲノールと同じ道徳関連週間紙をとりあげた W.マルテンスの研究はランゲノールの考察の水準を遥かに越えるものを提示している。ここでとくに注目し値する点は、週間紙が新たに「読書人を形成」したことに着目し、その顕著な事例として「読書する婦人」を発見したことである。まず『デア・ゲゼリゲ』紙（1748—1750年）に記載された該当箇所をみておこう。

（或る人が友人を訪問した時の様子）「私が友人の部屋に入ると、奥さんが紡ぎ椅子に座っていた。その脇に低い机があって、そのうえに1冊の本が開かれたままにしてあった。奥さんは器用に紡ぎと読書をいっしょにこなしている」⁽³⁸⁾。マルテンスは婦人の読書光景が決して非日常的なことではなく、むしろ日常的なことに属し、これを女性の「読書狂」徴候とみている。ただしこの徴候は上層市民および農村貴族の「婦人部屋」に限定されたものであった。だがこれが18世紀末の読書会へ発展する先行形態であったとみなされた⁽³⁹⁾点は重要である。すなわち、当時の上層社会にあっても読書行為を制限されていた女性がその壁を打破して「読書狂」へ向かう現象は、ちょうど読書力をもった農民が読書人として出現することを抑えていた社会的制限が弛緩ないし解体しつつあったことを予告するものであったからである。

[iii] だが同時代人の民衆啓蒙家と今日の研究者はこの予告を感得することができなかった。その理由は、すでに指摘したように、村落学校教授の不振による読書力の欠如というゆるぎない確信が両者に支配していたからであった。ところが、興味深いことに、両者の考察自体がこの読書力の欠如を事実上否定する現象にも及んでいたのである。これについてはすでにグラートホフがあげた農民新聞の内容から指摘したが、シェングの場合も「大衆読本」、とくに「三文小説」、「低俗小説」とレッテルをはられた民衆本の考察がこれに該当する。シェングはこれを農民が「読書欲をみたま」現象であったとみている⁽⁴⁰⁾。この現象自体は1794年の民衆本の『検閲強化令』からも確認される（4月26日勅令）⁽⁴¹⁾。すなわち、勅令は、民衆本が農村に大量普及したことによって、農民読書人の間に「法と権威にたいする不服従と反抗姿勢」が顕在化したことを指摘し、これをきわめて重大視していた。この指摘はたんに成人読書人の普及を確認したにとどまらない。ヨアヒムスタール校で「品性のない、流行本」が「禁書」にされた事例⁽⁴²⁾からも明らかなように、読書層は子ども以上の年齢層に着実に広がっていたのである。このように、問題は、第1に農村における農民読者の存在状況と第2に読書力の水準がどの程度のものであったのかに帰着する。そこでふたたび研究史にもどってこの2点を整理しておきたい。

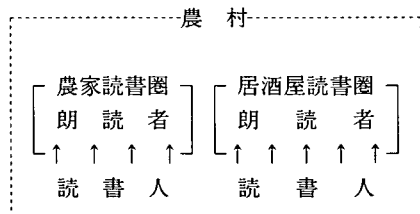
まず第1の点からみておこう。シェングはこれを民衆本の農村への普及から推定している。すなわちシェングは18世紀末に行商人 Kolporteur がこの普及を農村社会にもたらしたとみて、前者の増加が後者の普及をうみだしていると推定している⁽⁴³⁾。ところが、これにたいして、ジーゲルトは、行商人ではなく、これと書籍商人の中間的性格をもった製本親方であったとしている⁽⁴⁴⁾。そこでわれわれも定評ある F. W. A.ブラートリンク編纂のクールマルクの職業統計でこれを検証した。その結果、当地帯では、行商人はみいだされずに製本親方と書籍商親方の存在が確認された。そして時期と人数については1750年と1801年で、製本屋親方98/116人、書籍商人親方36/33人となっていた⁽⁴⁵⁾。この統計は、すでに1750年段階でクールマルクの農村社会に農民読書人が存在し、その読書圏が次第に拡大していったことをしめすものである。ただし、この数字から、その読書圏が散在していたかあるいはある地域に偏在していたかについては判断できない。しかし査察文書の現在の調査では前者とみられる。

つぎは第2の点である。勅令の指摘——「法と権威にたいする不服従と反抗姿勢」——にもとづくと、農民読書人の読書力が生半可なものではなかったことを予想させる。シェンダ自身はたしかにこの大量出版が18世紀末に現れた農民の「読書欲をみtas」現象であったとみている。だが、問題は、すでに明らかなように、この「読書欲をみtas」読書力がどのていどのものであったのかにある。ところが、シェンダは、奇妙なことに、学校教授の不振説を依然として固持していたのである。H.バウジンガーは、後段で紹介するシーゲルトとともに、農民の読書力の水準に注目した希少な研究者の一人である。彼によると18世紀90年代に「はじめて重要な識字段階」にはいり、これが「読書狂」の誘因となった⁽⁴⁶⁾。彼もこの「読書狂」の対象が「猥褻本」「感傷本」であったこと、これらの特徴が「でっちあげられた、小説世界の話」によって「現状にたいする不満を反映しかつそれを喚起」したとみている⁽⁴⁷⁾。だが、残念なことに、バウジンガーには個別事例分析がないために上記の「識字段階」についてはこれ以上言及することはできない。

[iv] このように、農民読書と読書力に焦点をあてて先行研究を整理すると、農民読書についてはつぎの2点が差しあたり確認される。第1点は、1750年代にクールマルクの農村地帯に民衆本の普及者（＝製本屋親方）が存在していたことである。第2点は、その普及が18世紀末に顕著な現象となったことである。しかしいま一つの読書力の実態についてはほぼ不明にちかい。その原因はどれも読書力を分析する視点を見いだせないところに起因しているようである。この研究史の閉塞状況を打破したのはジーゲルトである。彼は読書行為の形態に注目し、そこにおける〈読み人〉に注目した。

ジーゲルトはまず読書形態について、それが「朗読」スタイルであったこと、民衆の場合は「共同読書 Gemeinschaftslektür」であったことを発見した。すなわち、第1に家庭では夕べの団欒に就学児童が「最高の読み人」であった⁽⁴⁸⁾。第2に家庭外では居酒屋が共同読書の間であった。この点については他の文献でも確認されている。たとえば、シュレージェンでは1780年代以降村落の居酒屋にパンフレットや農民新聞が置かれ、読める者が朗読した⁽⁴⁹⁾。これと同じ事例がザクセンの村落居酒屋でもみられた。ともに、フランス革命後農民たちは「フランスと同じようにならなければならない」、(俺たちのところでも)「非常にうまくいくことを新聞やほかの記事から知っている」といった、新聞等を媒体とした対話がすでにごく普通の農村で交わされていたのである⁽⁵⁰⁾——。この〈読み人〉の朗読とほぼ同じ意味をもつものに〈仲間と歌う〉行為がある。この場合も歌われる歌詞が問題となるが、1790年にザクセンのプリスニッツ地方で領主に賦役強制の廃止を求めて蜂起した農民たちの間で歌われた歌詞は明らかに農民たちの日常世界を新たな世界の秩序と対置しており、この〈仲間と歌う〉ことも当時にあつては農民の広義の〈共同の読む〉という行為に入れられであろう⁽⁵¹⁾。

以上のように、農村における読書人の存在形態は個人単位ではなく、家および居酒屋が読書圏をなし、ここに朗読者と村民が読書人となる形態をとっていたことがわかるであろう(右下図)。もちろんこの読書人は間接的な読書となる。したがって読書人と読み人とは同一人ではなく、読書人と読書圏の存在はわれわれが予想する以上に広がっていたと考えられる。そこでつぎに朗読者である読み人の読書力についてみておかなければならない。



ジーゲルトは民衆本の内容水準をつぎのように評価している。まず、売手は「アルファベットの半分程度わかる農民」を買手のターゲットにすえた。だが内容および表現自体は版画を利用した民衆本『ティル・オイゲン・シューピーゲルの退屈しのぎの物語』（初版1515年）の水準であった⁽⁵²⁾。この水準の読書力をジーゲルトは「基礎的読み力」とみなし、シェンダとは対照的に、この能力水準を18世紀末の農民が習得していたと推定している⁽⁵³⁾。だがこの推定は、ジーゲルト自身これを個別事例によって検証していないために、信憑性に欠ける。ただし彼の判断の基準が実際に普及した民衆本の内容分析に基づいていることに留意しなければならないが、それにもかかわらずこの「基礎的読み力」についてはさらに実証的な考察が必要とされるであろう。

III. 民衆啓蒙研究の課題

このように、ジーゲルトは民衆本読者の読書力に強い関心をむけている。その理由は、彼が次の2点に注目していたからである。すなわち、好奇心から恋文、占い、夢判断および魔術といった「三文小説」を読書するという行為自体が、(i) 農民を文字を媒体とするコミュニケーション関係（読書圏）に組み入れ、(ii) さらに農民の自己自身のイメージや体験を記号によって定式化する機会をあたえたことである。ジーゲルトはこの2点をまったく新たに出現した農民自身の「自己形成 Selbstbildung」過程ととらえ、読書行為がこの「自己形成の機会を拓ける可能性をつくるものであった」という理解を深めていったのである⁽⁵⁴⁾。

このジーゲルトの指摘は、村落学校史に新たな光をあてるものであった。すなわち、村落学校の、社会的規律化機能とは異なる、農民の自己啓蒙を可能にする、いわば農民文化創造⁽⁵⁵⁾の機能に、新たな研究の光があてられる途が拓かれたからである。さらに換言すると、基礎学力が農村に「自己形成」の機会を与えかつ拡大するという〈民衆啓蒙〉史ないし学習社会史研究の課題が、いまや、われわれの考察の前にたちあらわれてきたのである⁽⁵⁶⁾。だが、ジーゲルト自身が告白しているように、この研究の前にたちはだかる最大の難点も、読者の「基礎的読み力」と「自己形成」の実証の問題であった。われわれはこの困難な問題を避けて通るわけにはいかないのである。すでに言及しているように、本小論に先行する拙稿「18世紀プロイセン農村学校における基礎学力」⁽⁵⁷⁾と「18世紀末ノイホルント教区の世界——農民日誌にみられる農民の世界像と日常行為——」⁽⁵⁸⁾はこの難題に取り組んだものであった。

註

- (1) I. Kant, Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?, in: Kant's gesammelte Schriften. Hrsg. von der königlich preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 8. 1. Abt. Berlin und Leipzig 1923, S. 35. 邦訳は『カント全集』理想社, 13巻, 1988年, 39頁に従う。
- (2) Ibid., S. 36. 同上邦訳41頁。
- (3) E.カッシーラー『啓蒙主義の哲学』中野好之訳, 紀伊國屋書店, 1976年, 3頁。

- (4) I. Kant, op. cit., S. 36, 37. 同上邦訳40, 42頁。なお篠田英雄訳(岩波文庫版, 1969年第19刷)では“Publicum”が「民衆」(8頁), 「読者界」が「読者全體」(10頁)とそれぞれと訳出されているが, これは文意を正確に伝えたものではない。
- (5) J. Habermas, Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990. Suhrkamp, 1993, S. 88. 細谷貞雄他訳『公共性の構造転換』第2版, 未来社, 1994年, 48頁。
- (6) J. Habermas, op. cit., S. 180. 同上邦訳145頁。
- (7) F. Gedike, Über Berlin: Briefe “Von einem Fremdem” in der Berlinischen Monatschrift 1783-1785. Hrsg. von Harald Scholtz, Berlin, 1987, S. 29.
- (8) Ebenda. H. Scholtzの脚註。
- (9) F. Gedike, op. cit., S. 109.
- (10) F. Gedike, op. cit., S. 126.
- (11) F. Gedike, op. cit., S. 130. さらに Ders., Gedanken über die geographische Methode, in: Basedow/Campe (Hrsg.), Pädagogische Unterhandlungen, Dessau, 5. Jg. 1780, S. 499. を参照。
- (12) I. Kant, op. cit., S. 38f. 同上邦訳44頁。
- (13) 450 Jahre Evangelische Theologie in Berlin. Hrsg. von Gerhard Besier u. Christof Gestrich, Göttingen, 1989, S. 151f, 162.
- (14) 拙稿「J. Chr. Wöllnerの宗教政策の社会的背景——プロイセン『宗教令』(1788年)の歴史的位置——」『人文研究』第63号, 小樽商科大学, 1982年を参照。
- (15) 拙稿「教区における社会的紀律化空間——教区査察による公的生活圏の創出——」上越教育大学研究紀要第13巻第2号, 1994年(以下では拙稿[1994])を参照。
- (16) 同上55-56頁
- (17) 拙稿「18世紀末ノイホルント教区の世界——農民日誌にみられる農民の世界像と日常行為——」上越教育大学研究紀要第12巻第1号, 1992年9月(以下では拙稿[1992. 9.])および拙稿「教会・学校査察文書の史料的价值」上越教育大学研究紀要第14巻第1号, 1994年の「資料5. パブリッツ教区査察報告一覧表(1812-1827年)」(32頁)を参照。なお筆者も1993年5月下旬に H. ショルツ教授の運転でノイホルントを訪れ, 当村の村長の案内で数人の農民にインタビューする機会をえた。ごく普通の農村風景のなかに散居する農家はいずれも旧く, なかには18世紀初頭来の家屋を今に残すものもあった。村長はじめインタビューに応じた人々は当村が J. ベータース(註56参照)によって詳しく紹介されたことを非常に誇りにしていた。インタビューに応じたある農夫は「遠い東洋の国からなぜここに調査にきたのか」と筆者に尋ねたが, 筆者は「ノイホルントの村民が18-19世紀にかけて周辺の農村に比べ読み書きの能力が非常に高かったことに強い関心をもっている」と答えた。するとその夫婦は賛意を表すようにしきりにうなずいていた。この光景がいまも脳裏にやきついている。
- (18) 拙稿「18世紀プロイセン農村学校における基礎学力」『日本の教育史学』日本教育史学会紀要第35号, 1992年10月(以下では拙稿[1992. 10.]), 159-165頁。
- (19) 同上166頁。
- (20) Acta betreffend den Schulunterricht (Brandenburg) 1780-1819. GStAPK, X. HA, Rep. 2b II, Nr 1314. Acta betreffend den Einrichtung und Verbesserung des Schulwesens zu Joachimsthal und die Anstellung und Besoldung der Lehrer 1781-1855. GStAPK, X.

- HA, Rep. 26II, Nr. 4082. In: Geheimes Staatsarchiv der Stiftung Preußischer Kulturbesitz in Berlin-Dahlem.
- (21) G. Petrat, Schulunterricht. Seine Sozialgeschichte in Deutschland 1750-1850. Salzburg, 1979.
- (22) 拙稿 [1992. 10.] 159頁。
- (23) 拙稿 [1992. 9.] を参照。
- (24) 喜安朗『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』平凡社, 1994年, 149, 156, 204-205, 256頁を参照。
- (25) 同上221, 223頁。
- (26) 同上224, 226頁。
- (27) 同上247頁。
- (28) 註36を参照。
- (29) R. Schenda, Volk ohne Buch. Studien zur Sozialgeschichte der Populären Lesestoff 1770-1910, Frankfurt a. M., 1977. R. Siegert, Aufklärung und Volkslektüre Exemplarisch dargestellt an Rudolph Zacharias Becker und seinem »Noth- und Hilfsbüchlein«, in: Archiv für Geschichte des Buchwesens 19, Frankfurt a. M., 1978.
- (30) H. Böning, Die Genese der Volksaufklärung und ihre Entwicklung bis 1780, in: H. Böning & R. Siegert, Volksaufklärung. Bibliographisches Handbuch zur Popularisierung aufklärerischen Denkens im deutschen Sprachraum von den Anfängen bis 1850, Bd. 1, Stuttgart, 1990.
- (31) H. Böning, op. cit., S. III-XL.
- (32) E. Grathhof, Deutsche Bauern- und Dorfzeitung des 18. Jahrhunderts. (Inaugural-Dissertation) Würzburg, 1937. W. Martens, Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften, Stuttgart, 1968.
- (33) E. Grathhof, op. cit., S. 3, 103.
- (34) E. Grathhof, op. cit., S. 9.
- (35) E. Grathhof, op. cit., S. 22.
- (36) H. Langenohl, Die Anfänge der deutschen Volksbildungsbewegung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften, Stuttgart, 1968, S. 535. とくに, S. 9f, 16, 50, 56, 63. 参照。我国では鳥光美緒子「道德週刊誌の教育観に関する一考察」(福岡教育大学紀要第34号第4冊分, 1984年)がこの分野の開拓的研究成果であるが, 鳥光の基本的な視点と教育史認識はランゲノールと同様である。すなわち, 鳥光の視点で特徴的なことは, 道德週刊誌の「教育的啓蒙的(または「道德的」: 引用者)意図」に「教育観」をみようとする立場である。そもそも道德週刊誌は, 例示された雑誌掲載の項目からみても, もともと鳥光が考えていた「意図」をもつもので, この「意図」こそが, 特に我国の教育史研究では, 「教育」と機械的に置き替えられてきたものである。この立場では「教訓的啓蒙的(または「道德的」: 引用者)」は「教育的」と置き替えられても不都合は何ら生じてこない。換言すればこの「意図」を「教育観」でみなければならぬ積極的な(オリジナルな)意味が, 筆者の理解では, 伝わってこない——結局ここでは「健康論」「自然論」を「すべて教育に帰着」させる(たとえば56頁参照)いわゆる「教育還元主義」が明瞭にみられる。さらにこれに関連して「啓蒙」も「教育」と置き替えられ, その結果「啓蒙」が道德的意図を「教え込む」と「教え込まれる」という2項対立的な関係として理解されている

ことも特徴的な点である。鳥光の視点は教育史研究の分析対象を道徳週刊誌にまで上げたという点で画期的な意義をもったが、しかしその分析の手法と教育史認識は以上のような研究史がもつ強固な制約をいまだに背負っていた、といえるであろう。

- (37) H. Langenohl, op. cit., S. 13.
- (38) W. Martens. op. cit., S. 535.
- (39) W. Martens. op. cit., S. 540.
- (40) R. Schenda. op. cit., S. 268f. なお、ドイツの民衆本については、藤代幸一「ドイツ民衆本への招待」,『ドイツ民衆本の世界Ⅰ』国書刊行会, 1987年を参照。
- (41) Rescript an das Cammergericht, wegen der Mißbräuche, die bey der Censur zu deren Bereitelung überhand genommen. 法文は, Novum Corpus Constitutionum Prussico-Brandenburgensim Praecipue Marchicarum..., 1761-1799. Bd. 19, S. 2147f.
- (42) GStAPK, X. HA, Rep. 26II, Nr. 4082.
- (43) R. Schenda. op. cit., S. 267-268.
- (44) R. Siegert. op. cit., S. 968f.
- (45) F. W. A. Bratring, Statistisch-Topographische Beschreibung der Gesamten Mark Brandenburg [1804, 1805, 1809] Berlin, 1968, S. 65.
- (46) H. Bausinger, Aufklärung und Lesewut, in: Württembergisch Franken Jahrbuch, Bd. 64., Achwäbisch Hall, 1980, S. 180.
- (47) H. Bausinger, op. cit., S. 182.
- (48) R. Siegert, op. cit., S. 974.
- (49) E. Grathhof, op. cit., S. 34f. なおフランスにおいて「夜の読書会」といった共同の読書の存在は「きわめて疑わしい」とされている(ロジェ・シャルチエ『読書と読者』長谷川輝夫・宮下志朗訳, みすず書房, 1994年, 特に264-272頁を参照)。
- (50) H. Beding (Hrsg.), Soziale Unruhen in Deutschland während der Französischen Revolution, Göttingen, 1988, S. 152f.
- (51) 歌詞については拙稿「18世紀プロイセンにおける教育構造の分析(Ⅲ)——特に東プロイセン私領地区域の教育史的研究——」上越教育大学研究紀要第8巻, 1989年, 204頁。さらに喜安前掲書155-164頁のシャンソンを歌う行為の分析も是非参照。なお, ちなみに, 教養階層の読書スタイルもみておくと, 最近の研究では, 「読書の夕べ」(読書会)での朗読のほかに, 「私的で, 孤独な, 木々の下, 散歩しながらの一人読書」スタイルが世紀転換期ころから新たにあらわれてきた(マックス・プランク研究所歴史部門1990年度共同研究概要報告: Leser und Lektüre in Westfalen um 1800, in: Max-Planck-Institut für Geschichte Göttingen, Jahrbuch, 1990, S. 830.)
- (52) R. Siegert, op. cit., S.675. 邦訳は『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』藤代幸一訳(法政大学出版局1980年)および阿部謹也訳(岩波文庫版1994年)を参照。
- (53) R. Siegert, op. cit., S. 600f.
- (54) R. Siegert, op. cit., S. 1150.
- (55) 民衆本と民衆文化については, ロベール・マンドール『民衆本の世界——17・18世紀フランスの民衆文化——』二宮宏之・長谷川輝夫訳, 人文書院, 1988年, とくに10頁を参照。ただし, フランスの民衆本(青本)は民衆の「社会順応主義を培っていた」と見られる(同上, 226頁)。この点については上掲書所収の長谷川輝夫「民衆本の世界」, さらに同「18世紀フランスにおける『民衆』の読書」,『人文自然科学論集』東京経済大学, 第77巻, 1987

年，187頁も参照。

- (56) この視点については1992／93年の在外研究期間中にベルリン自由大学教授ハラルト・ショルツ博士とヴォルフガング・ノイゲバウアー博士より賛同を頂き，それが本小論を作成するきっかけとなった（但し，ノイゲバウアー博士はドイツの歴史学界でもこれを実証する史料の発掘が不十分で，ポツダム大学のJ.ペータース——例のカリース日誌の発見者——の実証研究が現在注目されるのみと指摘していた）。〈民衆啓蒙〉の現状と研究可能性を現地で調べるのが私の在外研究の目的の一つであったからである。
- (57) 拙稿 [1992, 10.]
- (58) 拙稿 [1992, 9.]

Die lesenden Bauern

——Neukonstrierung des Volksaufklärungsbildes
in der modernen preußischen Gesellschaft——

Mitsuo MASUI*

RESÜME

Konnte ein Volk das Licht der Aufklärung im 18. Jahrhundert genießen? Es ist sehr bekannt, daß ein Volk seit langem als das zu aufklärende Sein von Aufklärer und Historiker (H. Böning [1990], E. Grathof [1937], W. Martens [1968], H. Langenohl [1968]) betrachtet worden hat. Denn sie meinten oder aber glaubten, daß ein Volk die Lese- und Schreibfähigkeit gar nicht erworben hat. Erst in den 70er Jahren, d. h. durch der Entwicklung der sozialhistorischen Untersuchungen vom Lesen, wurden die Bauern, die das Lesebedürfnis und der Lesegeschmack haben, z. B. von R. Schenda [1977] und R. Siegert [1987], neu gefunden. Auch Ich konnte diese Tatsachen durch meine Untersuchung von dem Dorf Neuholland bestätigen, woran die lesenden Bauern, die die Lese- und Schreibfähigkeit in der Landschulen einst erlernt haben und sich selbst aufklären konnten, in den 1780er Jahren entstanden haben.

Hier möchte ich wieder Herrn Prof. Dr. Harald Scholtz und Herrn Dr. Wolfgang Neugebauer mein Dank für die sich auf mein Thema beziehende wichtige Gespräche abstaten.

[Inhaltsverzeichnis]

- I. Gesichtspunkt der Analyse der modernen Volksaufklärung
- II. Neukonstrierung des modernen Volksaufklärungsbildes
- III. Neuaufgabe der Untersuchung des modernen Volksaufklärung

* Division of Foundations